

2023年8月12日

筆記 行武 岡部

夏の自主勉強会 山口西田読書会（2023年8月5日）の Protokol

【テキスト】

旧全集の第四巻、西田幾多郎「場所」四 第1段落（250頁）から第2段落 252頁の5行目「主語となって述語となることなき基体が述語化せられ行くことである」まで。

【論点になったところ】

叡智的実在（状態としての自由）と自由意志（行為の自由）を対置し、それぞれの位置づけが述べられている。自由意志（行為の自由）が対立的無の場所に於ける意識作用に即して意識されるものということに異論はなし。232頁の「真の自由意志」と250頁の自由意志との違いも確認した。

そのほかの論点は次のとおり。

自由意志の消滅

「更にこの立場を越えて真の無の場所に入る時、自由意志の如きものも消滅せなければならぬ」から対話が始まる。内在的で即超越的な性質こそが本体であり、力や物はその属性であるとの立場を確認した。「真の無の空間に於いて描かれた」ものが叡智的実在であり、それは「見るもの」（観想=テオリア）でもある。

色が色自身を見る

「色が色自身を見る」ことを別の言葉で説明できるかが問題になったが、それはテキストの「感ずる理性」に対応しているとの理解でひとまず第2段落に進む。

やや愚痴だが……

段落の途中から話題が次に移っていくような書きぶりがされているので、段落ごとに内容を区切るより次の段落での展開も視野に入れながら読む必要がありそうだということが話題になった。

第2段落

ここでは「空間的直覚の上に立つ時、性質なるものは非合理的なるものとして、超越的根拠を有つものでなければならぬ」の一文が、それ以前の文脈と反対のことを言っているのか、そのままの文脈で物に対して「性質的なるもの」を説明しているのかが話題になり、後者の理解に落ち着いた。

空間において「性質的なるもの」は「何処までも量化することのできない超越的なるもの」であることを確認した。

第2段落 252頁以降

251頁15行目の「併しかかる超越的なるものを内在化しようといふ要求より力の考が出て来る」以降はまだ十分に検討されていない。

以上